

# 慣用表現、政治的戯画、間文化性

植 田 康 成

【キーワード】イディオム・イメージ・カリカチュア・インターカルチュラリティー・コノテーション

## 1 はじめに

本論考の目標は、日独の慣用表現（イディオム表現）と政治的戯画（政治的カリカチュア）を素材にして、日独両（言語）文化に関する研究における方法上の問題を考えることにある<sup>1)</sup>。

題目に沿って、まず、日独のイディオム表現の比較対照において、異文化間研究に関するどのような問題が生じるのかを、具体例に即して考えていく。次に、イディオム表現に依拠して描かれた政治的カリカチュアを取り上げ、そこにどのような異文化間現象を読み取ることができるかについて考えていく。最後に、日独両文化を具体例として、どのような異文化間研究上の問題が提起されているのかについて考えて、本論考を終えたい。本論考は、したがって、何らかの結論を提出するという性格のものではなく、何が追究されるべきかに関する論考であり、問題提起という性格のものである。

## 2 イディオム表現

### 2.1 イディオム表現の言語的特徴

イディオム表現の言語的特徴は、“Stabilität”（安定性、固定性）、“Idiomatizität”（イディオム性）、“Lexikalisiertheit”（語彙性）、“Reproduzierbarkeit”（再生産性）、“Bildhaftigkeit”（イメージ性）の5つに集約できるようである。本論考の主題と密接しているイメージ性についてのみ、ここでは述べる<sup>2)</sup>。

多くのイディオム表現は、イメージ性を伴っている。「首を切る」は、「(1)免職する、解雇する。(2)打ち首にする」という2つの意味を持っているが、(1)はイディオム表現としての意味であり、(2)は字義通りの意味である。処罰として「首を切る」ということは、過去の日本では実際にあったことであり、その状況を思い浮かべることは容易である。自らの首をさすって、ぞっとする場合もあるといえよう。イディオム表現としての意味には、字義通りのイメージが伴っている。「頭から湯気を立てる」という表現は「かんかんになって怒っているさま」（『日本語大辞典』42頁）という意味であるが、真っ赤な顔で頭のとっぺんから蒸気が立ち上っている様子を思い浮かべるであろう。イディオム表現は、それゆえに、非常に感化的、感情的な作用を持つ表現であるといえる<sup>3)</sup>。

## 2.2 イディオム表現に見える異文化間現象

### 2.2.1 概念的暗喩、概念的換喩、慣習的知識

ケヴェチェス／サボー (Kövecses/Szabó 1996) は、イディオム表現の意味理解は、概念的暗喩、概念的換喩、慣習的知識の3つに基づいているとしている。

たとえば“*He was spitting fire*” (彼は激怒していた) 中の“*spit fire*”というイディオム表現は、“*ANGER IS FIRE*” (怒りは火) という概念的暗喩に基づいて理解されている。“*fire*”に関する概念的暗喩は、さらに、“*LOVE IS FIRE*” (愛は炎)、“*CONFLICT IS FIRE*” (紛争は火) 等、種々のものがあり得る。

概念的換喩とは、“*a factory hand*” (= *a factory worker*) (工員) といった表現の意味理解を支えるものであり、“*THE HAND STANDS FOR THE PERSON*”という表現形式を取る。「猫の手も借りたいほど忙しい」という日本語の言い回しの理解にもそのような概念的換喩が関与している。

“*handful*”が、なぜ“*a small number*”という意味になるのか。ここには日常的な慣習的知識が関与している。手一杯といっても、たとえば、リングはせいぜい数個しかもてない。手押し車で運ぶ場合と比較すると、少数ということになる。

### 2.2.2 「首」を構成要素とする日本語のイディオム表現

ケヴェチェス／サボーが提案しているイディオム表現の意味理解の3つのメカニズムに基づいて、さらに日本語の例について考えてみよう。

例えば、『朝日新聞』インターネット版からアクセスできる三省堂『大辞林』には、「首」を構成要素とする19のイディオム表現があがっている。その19のイディオム表現を、概念的暗喩、概念的換喩、慣習的知識 (事象の因果関係) に基づくものに分類してみると、次のようになる。

「首を括 (くく) る」は、多くの場合自殺行為を意味するが、これは、慣習的知識 (事象の因果関係) にイディオム表現の意味理解に基づいている。「首を切る」「首をはねる」も同じである。

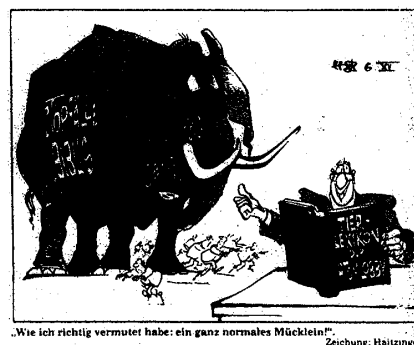
「首を挿 (す) げ替える」は、「役職にある人を更迭 (こうてつ) し、別の人を任ずる」という意味であるが、これは、概念的換喩に基づいている。「首を傾 (かし) げる」「首を縦 (たて) に振る」「首を横に振る」「首を捻 (ひね) る」「首が回らない」「首を長くする」も同様である (ただし、換喩関係 (「首」 stands for 「X」) における「X」は、すべての場合において同じではない)。

他の9のイディオム表現の意味理解は、すべて概念的暗喩に基づいている。イディオム表現の意味が、概念的暗喩に基づいている場合、これらのイディオム表現に登場している「首」は、基本義としての「(1) 頭と胴とをつなぐ、やや細くなっている部分。頸部。」という意味はもはや持っていない。「首が危ない」は、「解雇・解任されそうである」という意味だが、この表現において「首」は、「地位」を意味している。「首が繋がる」「首が飛ぶ」「首にする」「首になる」「首の皮一枚」「首を賭ける」についても同様である。

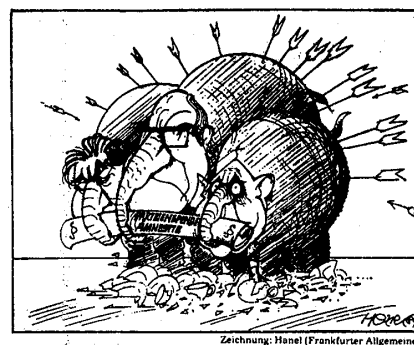
### 2.2.3 動物に関するイディオム表現

「首を切る」といった一連の身体部位名を構成要素とするイディオム表現19のうち17については、概念的暗喩、概念的換喩、慣習的知識（事象の因果関係）に基づいていると言えそうである。しかし、「首に縄（なわ）を付ける」「首を突っ込む」の2つについては、事情が異なっている。そこで言及されている対象は、本来的には動物である。動物の行動や動物に対する人間の対処の仕方が、転用されているのである。

このことは、とりわけ動物名を構成要素とするイディオム表現について当てはまると思われる。“sich wie ein Elefant im Porzellanladen benehmen”（陶器店における象のように振る舞う），“ein Gedächtnis wie ein indischer Elefant haben”（インド象のような記憶力を持つ），“aus einer Mücke einen Elefanten machen”（蚊から象をつくる），“nachtragend wie ein indischer Elefant sein”（インド象のように執念深い）といったドイツ語の言い回しで表現されている象の行動や性質が、人間に対して適用されるのである。



上記の“Elefant”（象）に関するドイツ語のイディオム表現から判断する限り、ドイツ語において象は、決して良いイメージを付与されていない。「蚊から象をつくる」（針小棒大、大げさな話をする）という言い回しにおいても身体の巨大さだけが強調されている（上のカリカチュア：Badische Zeitung, 8. Dezember 1988）。象が厚い皮膚を持っている（Dickhäuter, Dickfelligkeit）ため、あらゆる批判にも動じない、つまり「鉄面皮」というネガティブなイメージが支配的である。実際にそのような政治的カリカチュアも数多く描かれている（右のカリカチュア：Badische Zeitung, 11. Mai 1984）。日本の動物園では愛されている動物であり、人間的な感情を解する「象」いう、多くの日本人が抱いている象のイメージとはだいぶ異なっている。



「蟻」についても日本とドイツには大きな差がある。ドイツ語においてはイディオム表現の構成要素としては登場しない。日本語については『成語林』（尾上〔監修〕1992）には「蟻」を構成要素とする言い回し12が収録されている。それらの言い回しを見る限り、蟻の身体の小さなこと、従って、その行為も取るにたりないということが中心的な意味をなしている。しかし、その小さなものが多数集まり（「蟻も軍勢」）、小さな行為が積み重なると大事業に至り得る（「蟻の塔を組む如し」）ということもいわれている。何よりも「蟻の歩み」という言い回しが多くの日本人にとっては、「蟻」の勤勉さを言い表しているものといえよう。しかし、ドイツ語母語話者にとっては、勤勉さは蟻ではなくミツバチの特性として連想されているのである。まさに、

“bienenfleißig”（ミツバチのように勤勉な）という形容詞の存在がそのことを証している。ドイツにおいても『イソップ物語』の中の「蟻とキリギリス」の話は、あまねく知られているにもかかわらず、である。

「牛」も、日独の間では、そのイメージに大きな差がある動物といえよう。日本語の「牛（うし、ぎゅう）」を構成要素とするイディオム表現を見る限り、鈍重さが慣用的意味の中心をなしている。牛は、歩みは遅くても、確実に前進する忍耐強い動物として、プラス評価されている。本来は菅原道真をまつる天満宮においては、道真公と並んで信仰の対象となっている（これは、隣接性、つまり換喩的な思考によるものといえよう）。これに対して、“blöde Kuh”（愚かな雌牛）という女性に対する罵り言葉に代表されるように、ドイツ語のイディオム表現における「牛」は、決していい意味を持ってはいない。“heilige Kuh”（神聖な牛）という言い回しがあるが、これはヒンドゥー教の見方をドイツ語に取り込んだものであり、ドイツ語本来の表現ではない（右のカリカチュア：Badische Zeitung, 5./6. Januar 1989）<sup>4)</sup>。牛に対する日独のイメージの違いは、農耕作業において欠かせない貴重な労働力としての「牛」と、牧畜においてミルクを供給し、人間に利用されるだけの存在としての「牛」という捉え方の違いに起因しているといえる。「牛歩」という表現も、のろいということを強調しているものであり、決して否定的な意味合いはなかったといえる。「牛歩」という日本語をドイツ語に置き換える場合、“Ochsengang”とするか、あるいは“Kuhschritt”とするか。“Ochsengang”は「苦難に満ちた長い道」という意味を持っている。したがって、「牛歩」は、“Schneckentempo”（蜗牛の歩み）ということになる。ただし「牛歩戦術」という場合は“Kuhschrittstrategie”あるいは“Kuhschritttaktik”といっても誤解されることはないだろう。



日本では、「黒猫ヤマト」のヤマト運輸をはじめとして、動物をマスコットにしている運送会社が目につく。カンガルー（西濃運輸）、ペリカン（日本通運）、ピューマ（トナミ運輸）、タイガー（山陽自動車運送）等、それらのマスコットは、迅速、丁寧というメッセージを伝えられていると考えられる。象は引越の際必要とされる力強さをアピールしている（松本引越センター）。パンダ（サカイ引越センター）、小熊（名鉄運輸）のように、かわいらしさ、親しみやすさを伝えようとしているマスコットもある。運送会社以上に動物マスコットと結びついているのは、スポーツ、とりわけプロ野球チームであろう。鯉（広島カープ）は、それほど強いイメージではないが、竜（中日ドラゴンズ）、虎（阪神タイガース）、鷹（ダイエー・ホークス）、ライオン（西部）、野牛（近鉄バファローズ）等、力強さをメッセージとして伝えるものが多い。燕（ヤクルト・スワローズ）は、素早さである。巨人は、まさにその名の通りのメッセージを伝えようとしていると言っていい。プロサッカー・チームでは、鹿（鹿島アントラーズ）しか思い浮かべないが、

足の速さを強調していると言える。こういったマスコットは、いずれも日本人がそれらの動物に対して抱いているイメージを反映していると思われる。

「犬」や「牛」のように、ペットあるいは家畜として人間と生活を共にしてきている動物も多い。なじみとなった動物の外見、行動の特定の特徴が言語表現に取り込まれ、イディオム表現となっている。実際の言語表現は、暗喩である場合もあるし（魚の目）、直喩である場合もある（猫の鼠を伺うよう）。動物のどのような外見的特徴、どのような行動の特徴、あるいは人間にとっての有用性、有害性のいずれに焦点を合わせてとらえているかが、表現の意味内容を決めていると言える。そして、その焦点の合わせ方は、言語によって、同じようである場合もあるし、異なっている場合もある。それを明らかにしていくのが、異文化間研究の課題といえよう。

### 3 政治的カリカチュア

#### 3.1 イディオム表現と政治的カリカチュア<sup>5)</sup>

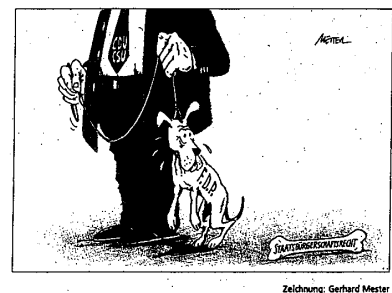
新聞や雑誌に掲載されている政治的カリカチュアには、イディオム表現に依拠して描かれたものが多いことに気づく。どのようなイディオム表現に基づいているかの判断は、個々の読者の言語能力の一部としてのイディオム能力に依存する。母語話者間でもイディオム能力には差があるという事実を考慮するならば、資料としての政治的カリカチュアの選択において、限定条件を付す必要がある。すなわち、本論考で取り扱う政治的カリカチュアは、筆者の日本語、ドイツ語両言語におけるイディオム能力の到達度、限界を示すものでもある。

なぜ、イディオム表現に依拠して描かれた政治的カリカチュアが多いのか。それは、イディオム表現がイメージ性に富んでいるからであり、読者に感化的な作用を及ぼすからだと言える。そして、カリカチュアの描き手にとっては、絵のモチーフとして利用しやすいということである。

政治的カリカチュアを見たとき、何を手がかりにして、当該の政治的カリカチュアが特定のイディオム表現に依拠して描かれたと判断できるのであろうか。原理的には、上述したように、読者のイディオム能力に依存しているということであるが、政治的カリカチュアそのものに手がかりが与えられている場合も多い。

シュトルツェ（Stolze 1999）は、あるイディオム表現とそれに基づいて描かれた政治的カリカチュアの間を、形式的、現象的に、3通りに分けている。

第1番目の部類は、カリカチュア全体がひとつのイディオム表現を描き出しているものである。右のカリカチュア（Stolze 1999: 370）は、“jemanden an der (kurzen) Leine halten”（誰かを意のままにコントロールしている、手綱を引き締めている）というイディオム表現そのものを描いている。つまり、イディオム表現の文字通りの意味の理解に基づくイメージを描き出しているということになる。何が描か

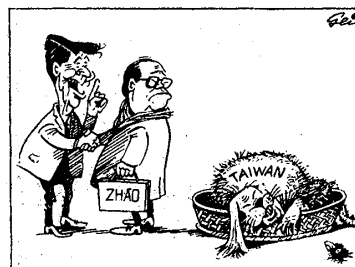


れているかは見て取れるとしても、それがどのようなイディオム表現に基づいているかを判断するのは、そう簡単ではない。なぜか、それについてはさらに3.2節で考察する。

第2番目の部類は、カリカチュアの中に当該のイディオム表現が描き込まれているものである。右のカリカチュア (Stolze 1999: 371) の吹き出しには、“Die Katze ist nach wie vor fest im Sack!”とあるが、これは“die Katze aus dem Sack lassen” (本音、真意、秘密をもらす) という表現と密接しており、そのバリエーションであるともいえる。



第3番目の部類は、カリカチュアの説明のテキストにイディオム表現が登場しているものである<sup>6)</sup>。右のカリカチュア (Badische Zeitung, 13. Januar 1984) には、“Chinesische Weisheit: Man soll keine schlafende Hunde wecken” (中国の知恵：寝た犬を起こすな) という説明が付され、寝た犬 (台湾) が描かれている。ドゥーデン『ドイツ語イディオム辞典』には、“schlafende Hunde wecken” (寝た犬を起こす) という表現が収録されている (DUDEN 1992: 622)。



### 3.2 政治的カリカチュアに見える異文化間現象

あるイディオム表現にもとづいて描かれた政治的カリカチュアの多くは、上述したように (3.1節)、その当該のイディオム表現の字義通りの意味理解に基づくイメージを描き出したものといえよう。たとえば右のカリカチュア (Badische Zeitung, 17. Juli 1987) は“mit etwas keinen Hund hinter dem Ofen hervorlocken [können]/vom Ofen locken [können]” (何かで暖炉の後ろにいる犬をおびき出すことはできない：誰かの関心を引き起こすことはできない) という言い回しにもとづいて描かれたものと考えられる。その言い回しの主要構成要素である“keinen Hund hinter dem Ofen” (暖炉の後ろにいない犬) を少し変えた“Der Hund hinter dem Ofen” (暖炉の後ろの犬) が説明のテキストとなっていることから、そう断じていい。このカリカチュアは、まさに説明のテキスト通りの絵となっている。「暖炉の後ろにいない犬」を描き出すことはできないので、「暖炉の後ろにいる犬」を描いているのである。



イディオム表現の字義通りの意味理解に基づくとしても、描かれる対象のイメージには、日独相異なっている場合が多い。もちろん、カリカチュアの描き手の個性的な描き方、とらえ方の特徴は無視できないのであるが。たとえ指示対象 (デノテーション) が同じであっても、その言葉から喚起されるイメージは、必ずしも同じではない。

日本語の「蛇」は、両義的であるといえる。「白蛇」はまれであるため、崇拜の対象ともなっている。他方、神話に登場する八岐大蛇（やまたのおろち）に見るように、人間にとって災厄をもたらす存在でもある。伝説的には蛇は女性に姿を変え、執念深く復讐をねらうともされている。他方、ドイツ語の“Schlange”についてはどうか。“Schlange”という語から“giftig”（毒を持った）や“lang”（長い）が連想されることは、生物としての蛇の特徴であるといえる。しかし“hinterlistig”（下心がある、狡猾である）や“falsch”（偽りの）が連想されるというのは、旧約聖書に由来するといえるだろう。右のカリカチュア（Badische Zeitung, 27. Mai 1988）は、その旧約聖書のアダムとイヴの「楽園追放」をモチーフとしている<sup>7)</sup>。



「竜」のイメージも日独において差がある。多くの日本人がイメージする竜は、「蛇のような胴体を持ち、頭には二本の角、口には牙が生え、口元には長いひげがある...」（時田：634頁）。まさしくおどろおどろしい姿をしている。沼や池に住み、時に天に昇り、天翔る。『大辞林』には、水をつかさどる竜神として、農業と結びつき雨乞い祈願の対象となり、漁師にも信仰された、という説明が載っている。日本の竜のイメージは、発祥はインドで、中国を経由して日本に渡来しているということだろう。ドイツ語母語話者たちが抱いている竜のイメージは、日本人が抱いているもの（右の写真）とは、異なっているようである。極端に言えば、大型のトカゲに羽が生えたという感じである。政治的カリカチュアに描き出された竜を見る限り、そうなっている場合が多いようである。



（右のカリカチュア：Badische Zeitung, 27. September 1984）。それは「竜」を意味する本来のドイツ語が“Lindwurm”であり、いわば「虫」となっていることとも関係があるのかもしれない<sup>8)</sup>。

“nach dem rettenden Strohalm greifen”（救いのわらをつかむ）というドイツ語のイディオム表現には主語は明示されていないが、日本語の「溺れる者はわらをもつかむ」に対応している。ドイツ語の“Strohalm”に「藁」という



日本語を対応させることは必ずしもまちがいではないが、ドイツ語で“Strohalm”といった場合、そこでイメージされているものは「麦藁」であって、地域差、個人差はあると思われるが、日本人が一般にイメージする「稲藁」ではない。そこには、文化的、地理的な差が反映しているとい



(III/5)

れる (III/5) のは、おそらく牛であろう。しかし、ドイツ語の言い回しで引きずり回されるのは、本来はサーカスで曲芸を仕込まれたりする熊である。猿回しならぬ熊回しは、熊の鼻に鎖をつけて、村から村へと渡り歩いて、カスタネットの音に合わせて熊にダンスをさせていたということである (右の版画図：Dittrich 1975: 163)。

える (左のカリカチュア：Buscha/Buscha 1988: 47)。

“jemanden an der Nase herumführen”は、“jemanden täuschen, irreführen” (人を欺く、過たせる) という意味になっているが、本来は動物が対象であった。日本語では「鼻面を引き回す」という言い回しに対応することになるう

が、その場合「鼻面を引きずり回さ



Nach Hans Weiditz 1513

#### 4 間文化性追求の手がかりとしての見立て

種としての人類は、共通の外界における対象を認知、知覚していると考えてよからう。しかし認知、知覚している対象世界を、認識として取り込むについては、個々人、そして個々人が属する言語文化共同体、そして民族間に、違いが存在することも、経験的事実である。言語がすべてを決定するかどうかについては、断定的なことは言えないが、何を認識するかにおいて言語が重要な役を果たしていることは否定できない。認識された対象世界を言語化する過程においては、言語化をおこなう当の言語による言語的制限はいうまでもなく、歴史、文化、地理等、種々の要因が介在し、最終的な言語表現はさまざまに異なることになる。

日本語では、時計の時間を指す部分を「針」と呼び、そして長針、短針と呼ぶ。一番最小の時間単位を示すのは、なぜか秒針である<sup>9)</sup>。ドイツ語では、“Zeiger” ((時間を) 示すもの) である。そして“der große Zeiger” (大きな示すもの)、“der kleine Zeiger” (小さな示すもの) と、長短ではなく、大小である。英語では“the large hand” (大きな手)、“the small hand” (小さな手) である。“large” (大きい) と“small” (小さい) の対立となり、「針」そのものは人間の手に譬えている。おそらく、それは、ドイツ語の“Zeiger” (示すもの) <“zeigen” (指さす、示す) につながる発想であろう。イタリア語では「針」は“la lancetta”であり、「長針」「短針」はそれぞれ“la lancetta grande”、“la lancetta piccola”で、ドイツ語同様、大小という区別だが、“lancetta”は元来「槍」である。日本人が「針」と見立てたものを、イタリア人は「槍」とみている。

最近ではほとんど見かけなくなったが、「蝦蟇口 (がまぐち)」という言葉そのものは存在している。口金の部分を含めて、あけた状態が蝦蟇が口を大きく開けていると見立てているのである。ドイツ語には、フランス語からの意識“Geldbeutel” (金を入れる袋：巾着)、フランス語そのものの借用である“Portemonnai”、そして“Geldtasche” (お金のポケット：財布) の3語が並存してい



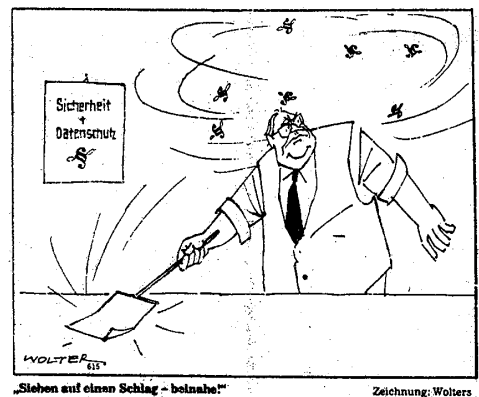
る。ドイツ語の命名はズバリそのもの、即物的であり、日本語の命名は婉曲的であり、金銭そのものに直接言及することを避けているかのようである。「蝶番（ちょうつがい）」と“Scharnier”の間にも同じような捉え方の差異を見て取ることができる。日本語は婉曲的というよりも詩的な表現というべき命名になっている。ドイツ語は語源からいうならば、ラテン語の“cardo”に由来し“Turangel”（ドアを引っかけもの）という、これもまさにその機能をとらえた命名となっている。

命名に際しては、見立てによる命名か、機能による命名かに大きく分けることができるようである。見立てによる命名はさらにその形状に焦点を合わせるか、性質に焦点を合わせるかに分けられると考えられる。それぞれの言語においては、「見立て」そのものが異なるだけでなく、見立てるとき焦点が合わされている特性にも違いがある。イディオム表現においては、そのような違いがもっとはっきりした形で出てきていると言える。

労せずして、楽に暮らしていけるというのは、現実には叶わぬ願いなのかもしれない。だからこそ、人々は桃源郷、天国（Paradies）といったものを思い描いてきたのであろう。そういう思いを言い表しているのが“einem gebratene Tauben in den Mund fliegen”（ローストチキンならぬロースト鳩が口の中に飛び込んでくる）というイディオム表現であり、日本語で言えば「鴨ネギ」と言うことになる（右のカリカチュア:Badische Zeitung, 21./22. Juli 1990）。



“Sieben auf einen Schlag”（一たたきで7つ）というのは、『グリム童話』「勇敢な仕立屋さん」に基づく言い回しである。実際に布きれでたたき落としたのは蠅であったのだが、「一発で7つ」（sieben auf einen Streich）とだけベルトに刺繍取りして、「蠅」という語は抜かしてふれ回ったので、ひとびとは一人で7人の人間をやっつけた勇敢な男だと誤解したのである。その誤解から始まって、この仕立屋は、奸智と機転によって、最終的には王女様と結婚し、王になるという、出世物語である。普通は“zwei Fliegen mit einer Klappe schlagen”（2匹の蠅をたたき落とす）と言う。数を7にして“sieben Fliegen mit einer Klappe schlagen”といえは、ほらを吹くということにもなる。日本語では中国由来の故事成句「一石二鳥」ということになる。ドイツ語では「蠅」、日本（中国）では「鳥」が対象となっている。レーリヒの辞典には、さらにイタリア語の対応する言い回しが載っているが、それは“pigliare due colombi/prendere due piccioni con una fava”（一つの空豆で2羽の鳩



を捕まえる) というものである (Röhrich 1991/92: 460)。空豆と鳩という組み合わせのほうが日本人にはよりなじみが深く、理解しやすい。「鳩に豆鉄砲」という言い回しもあるぐらいである。

たとえば人気歌手を取り巻いて人々が群れをなしている状態は、日本でもドイツでも見られる現象であろう。日本語では「黒山の人だかり」という表現がそのような事態について使われる。これに対してドイツ語では“Menschentrauben” (人々のぶどうの房) という。そこには、人種、文化の違いが反映している。言語化の過程において、当該の言語共同体の共同の知識、共同の体験といったものが、重要な役割を果たしている。

このことはイディオム表現に限らない。たとえばドイツ語の“Haus”と日本語の「家」についても言えることである。ドイツ語母語話者が“Haus”について抱いているイメージは、ドイツ語圏でも地域によって異なっていると言えるが、「居住のための建築物」という基本的意味 (デノテーション) は共通しているとしても、日本人が「家」について抱いているイメージとは、大いに異なる。そもそも日本とドイツでは、その建築様式、建築材料等が異なっている。“Haus”=「家」という等式は、基本的意味においては当てはまるかもしれないが、イメージ、コノテーションにおいては、当てはまらない場合が多いといえよう。

コノテーションという問題について考えるとき、個人的なコノテーション、つまりパロールの次元におけるコノテーションと、超個人的なコノテーション、つまりラングの次元におけるコノテーションを区別する必要がある。われわれは、言語習得の過程においては、とりあえずはラングにおけるコノテーションを習得するが、それは、パロールをとおして習得する。従って、個々人が個々の語に対して抱いているコノテーションは、ラングとして共通する部分を有しながらも、個々人の体験に基づく特有のコノテーションが付随しているのである。そして、個々人のコノテーションが、いつしかラングに移行し、浸透していくのは、言語変化の一般的パターンとも重なる。つまり、語のコノテーションも変化することであり、その変化をランデスクンデとの連関で追求することも、異言語文化に関する研究の重要な課題であるといえよう。

## 5 おわりに

異言語文化に関する研究は、言語文化による見立ての異同のみならず、その接触、交流にも目を向けながら遂行されてこそ、接触、交流しあう双方の言語文化の独自性を保持しながら、それぞれの言語文化が豊かに展開していくことに貢献することができるであろう。そのような異言語文化間研究の方向性を示唆するイディオム表現、そしてそれを支える「見立て」の実例を挙げて、本論考を終えたい。

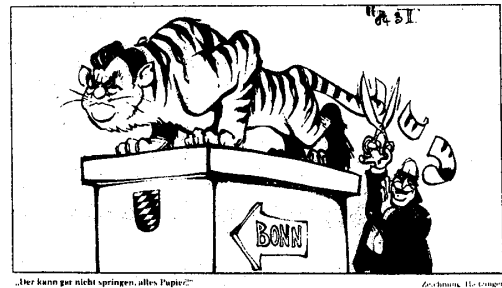
“Krokodilstränen weinen” (鱷の涙を流して泣く) という言い回しは、ドゥーデン『ドイツ語イディオム辞典』にもフリーデリヒ『現代ドイツ語イディオム辞典』にも収録されていないが、レーリヒ『ことわざ的な言い回しの大辞典』には見出としてあがっており、中世以来流布してい

る伝説に基づいているという説明がなされている（Röhrich 1991/92: 892）。『成語林』には、「鰐」を構成要素とするイディオム表現は、「鰐の口を逃れる」（＝虎口を脱する）だけが載っている。「鰐の空涙」という表現は、鰐がそもそも日本には生息していないのであれば、外来のものであろう（右のカリカチュア：Badische Zeitung, 9. Oktober 1985）。



“Tiger”（虎）は、ドイツ語圏には自然には生息していない。したがって、イディオム表現の構成要素としても登場しないのは、当然ともいえよう。レーリヒ『ことわざ的な言い回しの大辞典』

（Röhrich 1991/92）には、“ein Papiertiger (-drache) sein”（張り子の虎）という言い回しがあがっているが、“schlafende Hunde wecken”（寝た犬を起こす）と同様、中国語の表現を借用したものであろう（右のカリカチュア：Badische Zeitung, 4./5. Februar 1984）。「虎」についての確固としたイメージは、ドイツ語には存在

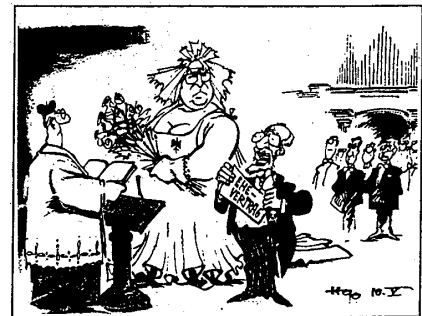


しないといえる。したがって、「虎になる」という日本語のイディオム表現を“ein Tiger werden”といっても全く理解されない。ドイツ語では“blau werden”がそれに対応する表現だからである。

次の日独2つのカリカチュアは、20世紀後半ドイツ史における大きな出来事であった東西ドイ



ツ統一に関するものであるが、日独の違いが非常にわかりやすい形で描き出されている（日本：『朝日新聞』1990年5月20日、ドイツ：Badische Zeitung, 15. Mai 1990）。2つの国家が1つになるという事



態を、結婚ととらえる点では同じであるが、花嫁と花婿が日独で逆になっている。そこには一般的に夫婦というもののイメージが関与していると考えられる。日本語には「のみの夫婦」という言葉があるように、ドイツのカリカチュアで描かれているような形

のカップルは、まれなのである。あくまでも男性のほうが外見的にも大きな存在であるべきだという考えが反映しているといえる<sup>10)</sup>。

## 6 注 釈

- 1) 本論考は2004年9月11日(土)に開催された「西日本言語学会」(於広島大学文学部)における発表原稿をもとに書き改め、政治的カリカチュアを貼り付け、ドイツ語レジュメを付したものである。
- 2) 以下2.1節におけるイディオム表現の言語的特徴については、Ueda 2003a(第2章)及びUeda 2003bに詳しい。
- 3) キューン(Kuhn 1985)が“*semantischer Mehrwert*”(意味的付加価値)という概念でとらえているのは、イディオム表現の持つ感化的な作用のことである。これについては、Ueda 1997において詳述してある。
- 4) 日本では神聖さを表すのは、後光ということになるだろうが、ドイツのカリカチュアでは、神様の頭上に輝く丸い輪(Heiliger Schein)である。寝そべっている牛の頭上にある丸い輪が、この牛が神聖な牛であることを表している。
- 5) 以下におけるイディオム表現とカリカチュアの関係についての、形式的、現象的分類については、Stolze(1999)の論文に基づいている。詳しくは、Ueda 2003bを参照。
- 6) シュトルツェの論文では、これとは別のカリカチュアで説明がなされているが、本論考では、動物名を構成要素とする日独のイディオムを主に資料としたいという意図から、カリカチュアを入れ替えた。
- 7) 『グリム童話』には、その肉を食べると動物の話している内容が理解できるようになるという「白い蛇」の話がある(KHM17)。ゲルマン人たちにとってかつては白蛇は不思議な力を持っている動物としてあったのではないだろうか。また、この話には「生命の木の林檎」(Apfel vom Baume des Lebens)というものも最後の方で登場する。「白い蛇」の物語にはゲルマン的要素とキリスト教的要素が混在しているといえよう。
- 8) クルーゲ『ドイツ語語源辞典』によると、“Drache”は、ギリシャ語“*drákōn*”(鋭い視線)に由来する。つまり、人を射抜くような鋭い視線を持った存在と言うことであろう(Kluge 1989: 153)。他方、“Lindwurm”の前半部分は、ラテン語の“*lentus*”(しなやかな)の形容詞“*lind*”に関係しており「しなやかな胴体を持った虫」ということになるようである。ドイツ語の“Wurm”(虫)は、古代においては、蛇や竜をも包括する広い意味を持っていた、とあるのが興味深い(Kluge 1989: 444)。古代の日本語においても、生き物は、獣と虫に二分されており、蛇は虫に属していたのである。
- 9) 時針、分針という名称は、秒針という名称が出現してきたあとで、いわばさかのぼって命名されたものであろう。
- 10) 本論考が対象としているのは、政治的カリカチュアというジャンル総体ではなく、イディオ

ム表現に基づいて描かれていると判断されるものだけである。限定された資料の観察に基づく論述である。政治的カリカチュアというジャンル総体についての論、日独の政治的カリカチュアの比較対照は、極めて興味深いテーマであるが、本論考の範囲を遙かに超えるものであり、将来における課題となろう。また、カリカチュアを読み（見）解くためのコード（決まり）が、日独において異なっていることも、（政治的）カリカチュアの日独比較対照研究の興味深いテーマといえよう。右のカリカチュア（Badische Zeitung, 21. April 1988）は、いっこうに動こうとしない亀を後ろから押して無理矢理動かそうとしている。その亀には、蜘蛛の巣が張り付いている。日本の漫画や政治的カリカチュアに蜘蛛の巣が描かれている場合、それは荒廃した状況を意味するが、ドイツのカリカチュアにおいては長い時の経過そのものを示唆している。荒廃した状況は、長い時が経過した結果として暗示されるだけである（後光に関する上記の注4）を参照。



## 7 参考文献

- Baur/Chlosta/Piirainen (Hrsg.) 1999** : Rupprecht S. Baur/Christoph Chlosta/Elisabeth Piirainen (Hrsg.), Wörter in Bildern Bilder in Wörtern. Beiträge zur Phraseologie und Sprichwortforschung aus dem Westfälischen Arbeitskreis. Baltmannsweiler: Schneider-Verlag Hohengehren.
- Buscha/Buscha 1988** : A. Buscha/J. Buscha, Deutsches Übungsbuch. Leipzig: VEB Verlag Enzyklopädie.
- Dittrich 1975** : Hans Dittrich, Redensarten auf der Goldwaage. Bonn: Fred Dümmers Verlag.
- DUDEN 1992** : DUDEN 11 Redewendungen und sprichwörtliche Redensarten. Idiomatisches Wörterbuch der deutschen Sprache. Bearbeitet von Günther Drosdowski und Werner Scholze-Stubenrecht. Mannheim/Leipzig/Wien/Zürich: DUDENVERLAG.
- Kövecses/Szabó 1996** : Zoltan Kövecses/Péter Szabó, Idioms: A View from Cognitive Semantics. In: Applied Linguistics, Vol.17, No.3, 326-355.
- Kühn 1985** : Peter Kühn, Phraselogismen und ihr semantischer Mehrwert. >jemandem auf die Finger gucken< in einer Bundestagsrede. In: Sprache und Literatur in Wissenschaft und Unterricht 16/56, 37-46.
- 『日本語大辞典』、講談社。
- Röhrich 1991/92** : Das große Lexikon der sprichwörtlichen Redensarten. 1-3. Freiburg/Basel/Wien: Herder Verlag.
- 尾上 [監修] 1992 : 尾上兼英 [監修] 『成語林』、旺文社。
- Stolze 1999** : Peter Stolze, Phraseologismen und Sprichwörter in politischen Karikaturen ausgewählter

Tageszeitungen. In: Baur/Chlosta/Piirainen (Hrsg.) 1999, 7-17.

時田 2000 : 時田昌瑞『岩波ことわざ辞典』、岩波書店。

Ueda 1997 : 植田康成「「壁」の崩壊とイディオム—“die Attitüde der beleidigten Leberwurst”—」『広島大学文学部紀要』第57巻、210-228頁。

Ueda 2003a : 『ドイツ語イディオム学習・教授法に関する総合的研究—日独イディオム比較・対照研究の視点から—』、現代図書。

Ueda 2003b : 「DaFの視点から見たイディオム表現の特性「具象性」」『レトリックと慣用語法 対照研究の諸問題—ドイツ語教育の視点から—』(柿沼義孝編)(日本独文学会)研究叢書021)、19-36.

## Idiomatische Wendungen, politische Karikaturen, Interkulturalität

Yasunari UEDA

Das Ziel der vorliegenden Arbeit besteht darin, unterschiedliche Bilder, die den deutschen und den japanischen idiomatischen Wendungen zugrundeliegen, und die darauf stützend gezeichneten politischen Karikaturen kontrastiv zu analysieren, um dadurch interkulturelle Aspekte bei der kontrastiven Phraseologie herausarbeiten zu können.

Die Daten hierfür wurden für das Deutsche aus dem Lexikon "DUDEN 11 Redewendungen und sprichwörtliche Redensarten Idiomatisches Wörterbuch der deutschen Sprache" (DUDEN 1992) und für das Japanische aus dem Idiomlexikon "Seigorin" (Ogami (Hrsg.) 1992) gesammelt. Politische Karikaturen sind hauptsächlich aus einer deutschen Tageszeitung (Badische Zeitung) herangezogen.

Einer idiomatischen Wendungen liegt meist ein Bild zugrunde, das aufgrund von der wörtlichen Bedeutung der Komponenten der betreffenden Wendung entsteht. Was jedoch in der jeweiligen Sprache - hier im Deutschen und im Japanischen - konkreterweise vorgestellt wird, ist nicht immer gleich, oft unterschiedlich. Diese Unterschiede der Bilder sollten zunächst bei der kontrastiven Phraseologie herausgearbeitet werden.

Beispielsweise soll die deutsche idiomatische Wendung "sieben auf einen Schlag" vom "Tapferen Schneiderlein" vom Gebrüder Grimm (KHM 20) herkommen. Im Märchen vom Gebrüder Grimm "Das tapfere Schneiderlein" schlug der Schneiderlehrling mit einem Tuchlappen sieben Fliegen mit einem Schlag tot. Um seine Tapferkeit der ganzen Welt zu zeigen, stickte er auf dem Gürtel mit großen Buchstaben "Sieben auf einen Streich!" und ging in die Welt. Der Wendung entspricht im Japanischen bedeutungsmäßig die Wendung "Isseki ni cho" (mit einem Stein zwei Vögel (schlagen)), die eigentlich aus dem Chinesischen kommt. Übrigens gibt es auch im Italienischen eine entsprechende Wendung "pigliare due colombi/prendere due piccioni con una fava" (zwei Tauben mit einer Saubohne fangen). Das Objekt und das Mittel des Schlagens oder Fangens sind in der jeweiligen Sprache verschieden, was auf unterschiedliche kulturelle Hintergründe hinweist.

Der große und kleine Zeiger der Uhr heißen im Japanischen "choshin"(die lange Nadel) und "tanshin" (die kurze Nadel). Im Englischen heißen sie "the large hand" (die große Hand) und "the small hand" (die kleine Hand), und im Italienischen "la lancetta grande"(der große Speer) und "la lancetta piccola" (der kleine Speer). Das gleiche Denotat wird in der jeweiligen Sprache jeweils mit einem anderen Ding

verglichen. Die Betrachtungsweise ist jeweils eine andere. Dabei spielen wohl die verschiedenen kulturellen Faktoren eine entscheidende Rolle.

Wenn man das Wort "Haus" hört, kann man darunter sowohl im Deutschen als auch im Japanischen eine Wohnmöglichkeit verstehen, aber die konkrete Vorstellung wird sicher anders sein, weil z.B. schon die Bauweise und das Baumaterial u.a. unterschiedlich sind.

Dass die Menschen sich gedrängt versammeln, ist eine phänomenale Erscheinung, die man gleichermaßen wahrnehmen kann, unabhängig davon, welche Sprache man als Verständigungsmittel benutzt. Diese Tatsache wird im Deutschen sprachlich z.B. mit dem metaphorischen Ausdruck "Menschentrauben" ausgedrückt, während sie im Japanischen mit der Wendung "kuro yama no hitodakari" (schwarzer Berg des Menschauflaufes) beschrieben wird. Im Deutschen ist das Bild von Trauben sehr vertraut, und deshalb ist der Ausdruck "Menschentrauben" anschaulich und leicht verständlich, gerade aufgrund von gemeinsamen Erfahrungen. Im Japanischen liegt das Bild eines schwarzen Bergs sehr nahe, weil das Menschengedränge durch die schwarzen Haare tatsächlich ganz schwarz aussieht.

Dass man ohne Arbeitsmühe angenehm und glücklich leben kann, ist wohl nur eine große Hoffnung. Deshalb erdenkt man sich ein Paradies, in dem "einem gebratene Tauben in den Mund fliegen". Die Bequemlichkeit im Paradies drückt man im Japanischen mit einem anderen Bild aus, nämlich "Kamo negi" (Wildente mit Schnittlauch) oder "Hidari-uchiwa" (Fächer in der linken Hand). Dem Paradies entspricht im Japanischen "Togenkyo" (wörtlich: Ort der Pflaume).

Man kann davon ausgehen, dass die Menschheit als Spezies trotz oberflächlicher Verschiedenheit die gleiche Wahrnehmungsfähigkeit besitzt. Aber was man in Wirklichkeit sieht, hängt wesentlich von unterschiedlichen Interessen ab. Und wie man die wahrgenommenen Tatsachen sprachlich zum Ausdruck bringt, wird wohl wiederum von verschiedenartigen Faktoren bestimmt. Bei der Versprachlichung der gleichermaßen wahrgenommenen Tatsache spielen das Gemeinwissen und die gemeinsamen Erfahrungen der jeweiligen Sprachgemeinschaft eine entscheidende Rolle. Dies kann man besonders an den metaphorischen Bildern, die idiomatischen Wendungen zugrundeliegen, erkennen.